

内田樹著「下流志向 学ばない子どもたち 働かない若者たち」講談社文庫 2009年7月15日刊を読む(I)

「矛盾」と書けない大学生

1. 大学入学者の学力低下は、実際に教育の現場に立っていると、しみじみ実感されます。
2. 先般、ある授業で100枚ぐらいレポートをまとめて読んだのですけれども、内容はさておき、文字がすごい。小学生のような丸文字がほとんどです。内容に関しては、一昔前なら小学校高学年程度というのが全体の半分ほどでした。「小学生的」というのは、自分の主観的な「好き／嫌い」「わかる／わからない」がほとんど唯一の判断基準になっているということです。「先生の言っていることが、私にはわからない」というのは、ふつう学生にとって自己評価が下がる事態のはずですけれど、そうではない。たぶん学生たちはそこに「批判」をこめているつもりで書いている。「言っていることが、好きじゃない」と、「言ってることが、わからない」という二つの言葉でやすやすと、ほとんど勝ち誇ったように、教師が提示する論件を乗り越えてしまう。
3. ある程度ロジカルであったりとか、ある程度知識があったり、あるいは教師の言うことに対して、「私はそれとは意見が違う」と反論を向けるといった「骨のある」ペーパーというのは100枚ほどのうちにわずか2、3枚という感じです。大半は、小学校の遠足の感想文みたいな、「遠足に行ってお弁当食べて楽しかった」みたいな感じの、「先生の授業を聞いて、いろんなことがわかりました」とか、これのどこがレポートかというような、愕然とするようなものばかりです。
4. しかし、もうそういうのにもだいぶ慣れてきましたので、それくらいのことでは最近では驚かないのです。これはうちの大学だけでなく、集中講義で行っている国立大学でもさして変わりません。
5. 大学生の学力低下のわかりやすい指標として誤字があります。今から7、8年前のことですけれども、うちの大学のレポートに「精心」という誤字があって、これを見たときにかなりショックを受けました。「精心」という字を見たら、本人だって、「あれ、どこか違うみたい……」と思うはずですが、そう思わないのが不思議です。
6. これはもうすこし最近のことですけれど「無純」という文字に出会ったことがありました。これは「精心」よりも衝撃が大きかった。というのは、この「無純」という文字を書いた学生はこの言葉を正しい意味で使っていたからです。つまり、「無純」を「矛盾」という意味で使っている。ですから、「むじゅん」という言葉を、オーラルで語っている限り、彼女の破綻は露呈しない。それどころか、この「無純」という文字は複数の対立するファクターが混在しているために「純では無

い」という事態を示している。つまり、彼女はこの字を自力で考え出したということです。「むじゅん」という音から推して「無」と「純」を組み合わせて造語したというのはかなり高い知力の持ち主であることを予測させます。問題は、それほどの知力を持っていながら、「矛盾」という字を再現することができないということです。

7. もちろん、矛盾を「矛盾」と書いたり「予盾」と書いたりする誤字はこれまでもよくありました、けれども、それは「矛盾」という字は知っているし、読めばわかるけれど、厳密には再生できないというだけのことです。そういう字はいくらでもある。読めるし、意味もわかるけれど、「書け」と言われるとちょっと書き順がわからない。「𠄎𠄎」とか「𠄎𠄎𠄎𠄎」とかは「書け」と言われても僕だって書けません。でもだいたいのかたちがわかっているならば、日常の用を弁ずるには不自由はない。でも、「無純」はそういう種類の不正確さとはレベルが違う。

8. ここで僕は考え込んでしまいました。「どうしてこの学生は『矛盾』という文字をこれまでの20年間の人生、読ま^ずに済^{ませ}てきたのか？」ということです。当然でしょう。新聞にも小説にも、「矛盾」という文字はどんどん出てきますから、彼女だって、これまでおそらく数百回、数千回この文字には出合っているはずです。にもかかわらず、「矛盾」という文字を読ま^ずに済^{ませ}てきた。

9. その理由は何でしょうか？

10. それを「本を読まないからだよ」と単純にくくってしまっただけでは話がわからなくなってしまうと思います。だって、彼女たちは文章はたくさん読んでいますから。マンガにしたって、彼女たちが愛読しているファッション誌だって、情報誌だって、大量の文字情報を含んでいます。もちろん「矛盾」程度の漢語はマンガにだってファッション誌にだって頻出します。それにもかかわらず、「矛盾」が書けない。なぜか？

P23 ~ 26

[コメント]

学校や家庭、学習塾で学ばなければならない理由が、本書ほどはっきりと「理解」できるものはありません。すべての教育関係者の必読書と考えます。

— 2015年11月18日 林 明夫記 —